

**服部** 辞めていく人間が抱負というのも何なので、わたしは39年、この筑波大学にお世話になってきた者として、附属学校の良さというものを語らせていただきたいと思っています。

まず、第一に、わたしが39年、筑波大学に勤めてきたということは異常なことのようにもいわれるわけですね。公立高校の教員ですと、一生のうちに5、6校ですか、異動するのが普通であるという考え方からすると、一つの所に39年もいたということは、「なんか、おかしいんじゃないか」という目で見られがちです。先ほど教育長さんの「ちょっと世界が狭いのではないか」というようなお話もありましたけれども、弱点としてはもちろんそれはあるわけですが、わたしは今、ここではその良さというものを強調したいと思います。

やはり一つの学校を勤め上げるという教員が、附属学校なればこそいるわけですね。今、一般的に学校が非常に非個人的である、顔がないといわれる時代に、附属学校というのは、一つひとつの附属学校が強烈な個性を持っていて、学校の顔をしっかりと持っているわけですね。それはなぜかという、みんな自分の学校意識というものを強烈に持っているからなのです。ここところが附属学校の一つの大きな長所であり良さであると、わたしは考えています。

二つめには、附属学校

というのは、やはり非常に小さな組織であるということです。筑波大学の全体では全職員で4,000人もいるような大きな組織ですが、坂戸高校でいえば、校長以下50人足らずの組織ですね。一人ひとりの教員が当事者意識を持って、自分が頑張らなければこの学校はダメなのだという意識を持っています。公立学校のように、しきりに「校長のリーダーシップの確立」というようなことを叫ばなくても、全員が自分の学校をいかによくしていくかということを常に考えています。

いわば小さな組織の中で、教員同士が関わり合うということが非常にパワーになっていて、そして、独特の学校文化をつくっているところが附属学校の良さですから、今後も伸ばしていくことが、大切なことではないかと考えております。

**司会** 谷川先生に、当面する課題はなかなか大変なものがいっぱいあるということも含めてお話をいただいた上で、それを乗り切るために附属学校教育局一丸となってこの1年を頑張ってみよう、というお話をいただければありがたいと思います。よろしくお祈りします。

**谷川** 法人化2年が終わろうとしているところですが、その法人化の中で非常に厳しい条件をいろいろ突きつけられていますけれども、逆に、われわれがかなり自由に裁量できる部分があることも事実なのです。

そのことの一つは、附属学校教育局は一部局として、そして、教育長は一理事として経営にも携わっています。

これは非常に好都合な条件なのです。両先生からお話がありましたが、要するに、つまり部局として経営の方針を立てられる権限を、やはり従来よりもはるかに強く持っているということですので、このことは非常に好都合なのです。

例えば、専門職大学院の問題も、それから附属学校間の人的な交流の問題も、やろうと思えばできる条件が出てきたというように考えられます。

わたしは、もうこうなった以上—こうなったというにはいろいろな意味がありますが、今まで持っていた常識をやはり覆していく必要があると思います。常識的なものにとらわれていたら、多分これからは乗り越えられないのです。

わたしが非常に尊敬していた漫画家の手塚治虫という人は、亡くなる前からずっと教育問題に随分いろいろな発言をされていた方ですが、彼は子ども向けに、夢というのは、二つ以上持ちなさいと言っています。子ども向けですよ。一つしか持っていない場合には、その一つの夢がつぶれたら、生きていけなくなってしまうというのです。二つ以上持っていると、一つの夢がつぶれても、必ず生きていけるというわけですね。

そのような意味でいうと、われわれもやはり夢は二つ三つ持っていたいわけです。例えば、大学院の問題もそうです。わたしが附属学校の先生方へお願いしたいのは、従来の枠にとらわれない、前向きに、破天荒でもいいから、やはり大きな夢をいいますか、それを持っていたきたいのです。

**司会** ありがとうございます。続いて、服部先生、どうぞ。

**服部** 谷川先生のような実行力があり、非常に構想力も豊かな先生を教育長に迎えたということは、最大の幸せなので、このことを生かして新しい年を切り切っていたきたいというのが、千田先生とともに、われわれ辞めていく人間のたいなる夢であり期待であります。

**司会** 千田先生、いかがでしょうか。

**千田** 谷川先生とわたしは大塚と一緒に着任して、谷川先生の決断力、それから高い見識、見通す力に本当に救われた思いがしています。

あと、もう一つ、どうしてもお話ししたいのは、学校教育には、裏方(事務)の力というのが非常に大きいということです。事務のみならずと意見交換、情報交換を密にして、大きな目標に向かっていくための十分な意思疎通を図っていくことが大切だと思います。

**司会** 谷川先生、千田先生、服部先生、お忙しい中、本当にありがとうございました。今年も、みんなで力を合わせて附属学校教育局の夢の実現に向けて努力できたらと思います。

千田先生



筑波大学附属中学校研究協議会

附属中学校 館 潤二

本校の研究協議会は今年で33回を迎えた。今年は久しぶりに土曜日開催とし、650人ほどの参加者があった。学校全体でのテーマを設けず、教科ごとの授業と研究協議が中心であることが本校の研究協議会の特徴である。午前中は講演会や研究部が中心に行う全体発表会と各教科の研究授業、そして午後は研究協議会を行っている。(いくつかの教科は午後にも2回目の研究授業を行い、その後研究協議会を持っている。)

今年は研究部による本校の教育課程の改訂案の発表とともに、早稲田大学の安彦忠彦先生による「学力観の二極化を排す～総合的学習と教科学習の関連も含めて～」という講演会を実施した。筑波大学の教員を講師や助言者とした研究協議会では、授業と教科研究に関して熱心な討論が繰り広げられた。今年各教科の協議主題は次のようであった。

教科	協議主題
国語	漢文教育のあり方
社会	社会科における法教育の実践
数学	小中高を見通した幾何のカリキュラム研究
理科	小中高一貫カリキュラムの展望
美術	小中高一貫教育に向けたカリキュラム研究
保体	保健と体育分野を融合させたトレーニング単元の構成
技術	技術の庸を追究する情報とコンピュータ学習
家庭	家庭科学習内容に関する意識調査を通して、指導の可能性を探る
英語	英語入門期指導を改めて考察する ～中学校入学以前の英語体験を探りながら～



第55回高等学校教育研究大会報告

附属高等学校 中塚義実

表記研究大会が12月3日(土)、筑波大学附属高等学校で行われた。参加者総数293名(招待者34名、学生31名、一般228名)はほぼ例年並みであり、北海道から沖縄まで、全国各地からこの日にあわせて来校された熱心な先生方と、密度の濃い一日を過ごすことができた。筑波大学からも、谷川彰英附属学校教育局教育長をはじめ、多くの先生方や学生・院生が参加し、高大の連携の深まりを感じた。

本校の教育研究は、日々の授業実践を中心に展開されている。参加者も、「公開授業」と「教科分科会」を目当てに来られる方がほとんどである。そこで、昨年度に続いて公開授業枠を2枠設け、その後の教科分科会ではさまざまなテーマで意見交換を行った。

教科	公開授業	科目及びテーマ	学年	担当
国語	漢文	漢文入門教材(故事成語)	1	渡辺雅之
地歴・公民	政経	財政(所得税を考える)	3	熊田 亘
数 学	数学B	ベクトルの導入	2	大野昭次
		数学II	図形と方程式	1
理 科	化学II	材料の化学	3	妻木貴雄
保健体育	体 育	柔道	1	鮫島元成
外国語	英語I	生徒の発話を促す指導	1	箱守知己
		英語II	生徒の表現力を伸ばす指導	2

教科	教科分科会テーマ
国語	語彙力と読解
地歴・公民	地歴科・公民科の授業における多様な学習形態・方法
数 学	数学の授業研究について
理 科	現行教育課程が抱える課題
保健体育	体育の授業で何を学ぶか —コミュニケーション能力の持つ意味—
外国語	公開授業の合評会

本年度は、初の試みとして、3年次で行われている総合的な学習「金曜スタディ」12講座の概要を、1F廊下に展示した。休憩時間に、多くの参加者が、生徒のレポートや授業風景などの展示に興味深くご覧になっていたのが印象的であった。

年1回の研究大会をより良いものにしていくためにも、今後とも多くの方にお越しいただき、ご意見いただければ幸いです。

